



佐々先生の 海外・帰国 あれこれコーナー

このコーナーでは、いろいろな立場の人たちの声を聞きながら、特に海外に住んでいる保護者の方々に役立てていただける情報や、参考になる考え方などを提供していきます。

取り上げてほしいテーマ、ご意見、ご感想などをお知らせください。皆様の声を聞きながら、このコーナーをできるだけ実際に役に立つものにしていきたいと思っています。連絡は、Eメールで、sasa@keimei.ac.jp までお願いいたします。

啓明学園中学校・高等学校 校長 佐々 信行（さっさ のぶゆき）

ハンブルク補習校、帰国子女受け入れ担当（横浜市）、日本語イマージョン・プログラム教諭（バージニア州）・ワシントン補習授業校を経て、現職。

Ladies First

それぞれの文化には、それぞれちがった問題の解決法があります。発想のちがう解決法をたくさん知っていれば、それだけいろいろな状況に対応できるということになります。一つの文化が他の文化の持つ発想を取り入れることで新しい力を得ることができれば、それは文化交流の成果にちがいません。成長の過程でいくつかの文化を体験する子どもたちは、今までの大人の発想では解決できなかった問題を解決したり、これまでとはちがった生活の豊かさを生みだしたりすることができるようになることでしょう。

◆ Ladies First と Volunteers

まず、私がアメリカの小学校で教えていたとき体験した二つの出来事をご紹介します。

一つ目は、何かよいことがあって、子どもたちにちょっとし

たご褒美をあげるような場面だったと思います。みんなが我先につめかけて混乱しそうになったとき、同僚の先生が使った言葉は、「Ladies First!」でした。すると、男の子たちは一斉に後ろに下がり、自然にきれいな列ができました。日本の先生なら、例えば、「今は2月だから2月生まれの人からね。」などと、日本の子どもたちが納得する言い方で混乱を収拾することでしょう。

日本の教室で「女の子が先」と言えば、男の子は納得しないでしょう。「女の子の方が弱いから」という理屈は小学生には通用しません。実際に、小学生では、年齢によっては、女の子の方が体も大きく精神的にも勝っているのですから。逆に「男の子が先」と言うと、なんだか封建的なにおいもしてやはりだめです。けれども、アメリカで「Ladies First」が文化の一部になっていることを知らせ、それがなぜなのかを考えさせれば、女性と男性がどのように力を合わせていくかということについて、より深い理解ができ、新しい発想が見えてくるかもしれません。

二つ目は、学年末に、校庭でちょっとしたパーティーをしたときのことです。ひととおり食事が終わってそろそろ帰り支度という時、テーブルの上に、片付けられていない紙皿やカップなどが散乱していました。だれかが、自分で使った食器を片付けるという当然しなければならないことを忘れていたわけで、私は、その子を見つけて責任を果たさなければならないと考えました。そこで、「片付けていないのはだれ?」と捜査を始めようとしたのですが、それより早く、近くにいた別の先生が、「あら、まだ皿が残っているわね。Volunteers!」と声をあげました。すると、たちまち数人の子どもたちが集まって来て、あっという間にテーブルはきれいになってしまったのです。先生は、ボランティアたちに感謝の言葉をかけ、子どもたちは晴れ晴れとした顔で遊びに戻って行きました。もし、私のように「犯人探し」を始めたら、不愉快な時間ばかりが費やされ、みんながいや



外国の友達と餅つきを楽しむ小学生